

国

(問題)

語

2021年度

⟨2021 R 03152023⟩

注意事項

試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

マーク解答用紙記入上の注意

- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄には、はつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	<input checked="" type="radio"/> 良い	<input type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い
	<input type="radio"/> 良い	<input checked="" type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い

記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	3	8	2	5						

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)
3 8 2 5 番
↓

解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は、

採点の対象外となる場合がある。

試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

次の A・B の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

内藤湖南の講演「大阪の町人学者富永仲基」（一九二二）を深い感銘をもつて聞いた武内義雄は、仲基からテクスト・クリティイーク上の強い方法的示唆を受取りながら、やがて論文「老子原始」を執筆する。この論文を収めた同名の著書『老子原始』は大正十五年（一九二六）に弘文堂から出版される。その書の序に「箋底に秘めたる老子原始一綴とりいで卷首に冠らせ」とあるから、論文「老子原始」の執筆は当然大正十五年に先立つ時期 湖南の講演を聞いた後であることになる。

さて武内は論文「老子原始」においてどのように『老子』に立向かうのか。

「今老子五千文を熟読するに、其の中異辞同意の言重複するもの甚だ多く、其の文亦た一律ならず。或いは辭賦に似たるあり、箋銘に類するあり、有韻の章あり、無韻の文ありて、其の説くところ時に矛盾するもの少からず。是れ豈一人一時の作ならむや。惟ふにこれ後の道家者流が分れて数派となれる後、各派所伝の老聃の言を会萃して一書となせるなるべし。」

ここで武内が向かっているのは「老子五千文（言）」と称される（不確かなテクスト）である。道家の祖老子の言を伝えるものとして歴史の過程で重みを加えてきた経文「老子五千言」は、今、武内の分析的なまなざしの上で腑分けとして披瀝するのが、新たな古代文献学である。そして虚構性の実証的な推理のはてに、古代文献学者が虚構として取除いた言説的残骸の底に見出そうとするのが（確かなテクスト）であり、多様な思想の混在である。要するに経文「老子五千言」の不確かさ、信用のなさである。

いわゆる「老子五千言」とは、信じられてきたように老子一人の手による著述ではない。神話的老聃の存在とともに「老子道德経」は、まさしく神話的な虚構とみなされる。それを虚構とみなす合理的な視点がその実証的な推理の過程を学として披瀝するのが、新たな古代文献学である。そして虚構性の実証的な推理のはてに、古代文献学者が虚構として取除いた言説的残骸の底に見出そうとするのが（確かなテクスト）である。（不確かなテクスト）を前にして古代文献学は形成され、古代文献学によつてはじめて（確かなテクスト）が与えられるのだ。

武内がまず「老子五千言」の虚構性をいうのは修辞上の視点からである。「老子五千言」と称されるテクストには多くのXの繰り返しが見られ、また文体、語法に明白な不統一がある。それは一時代の一人の手になるものでは決してない。さらに「五千言」を具に見れば、それが決して「純乎たる道家言」ではなく、そこには「法家言に類するものあり、兵家言に似たるあり、神仙家言と思しき」ものもあって、まさしく「老子」というテクストが老聃に仮託して語られた多様な言説の虚構の集成体であることがわかる。したがつて、「老子五千言」というテクストは種々の材料を「会萃」してなつたものだと武内はいうのである。

今、武内のするテクスト分析の一例をあげよう。『韓非子』に「解老」「喻老」の二篇がある。「解老」は老子の言を解釈したもの、「喻老」は古い伝聞佚事を引証して老子の言を説明したものである。その二篇は現存する最古の老子伝説であり、その二篇は古い老子伝説の残闕とみなされる。そしてそこに引かれている老子の言を見れば、これらの篇の作者が依拠せる「老子経文」は「今本老子」と大差ないものと推定される。そこからすると韓非学派が伝えてきた「老子経文」というテクストがあり、その伝承されたテクストにもとづいて韓非後学が「章次を改め、文字を校改せるもの」が「今本老子」であろうと推理される。しかもこの韓非後学をめぐる推定は、「今本老子中に法家言の存する所以」をも説明する。もちろん武内のするテクストの分析ははるかに精細である。しかしここでは武内が「老子五千言」を構成する諸家の言説をいかに弁別し、いかに「老子テクスト」を腑分けするかを、そしてその手続きがいかなるものであるかを見れば十分である。この武内のするテクスト批判のあり方に、仲基からの方法的示唆を読み取ることは容易である。しかし仲基からの示唆を受けてする武内の「老子テクスト」の批判は、いったい何に因由し、何を目指そうとするのだろうか。

だがこうした問いに武内はすでに答え、私もまた予め答えてしまつている。冒頭に引いた武内の「老子五千言」に寄せる視線が、すでにそうした問いへの答えを語っていた。繰り返していえば、彼に新たなテクスト・クリティイークを要請しているのは「老子五千言」というテクストの不確かさ、信用のなさであった。しかもそのテクストの不確かさに老子伝をめぐるいかがわしさがつきまとっている。晋・宋以後、老子の事跡を記するもの、多くは神仙の説詞を混へ、化胡の虚伝を襲ひて軽信すべからず」と、武内は老子伝説のいかがわしさをのべることばをもつて「老子原始」を始めるのである。こうしたことばをもつて始まる「老子原始」とは、すでにのべたように、老聃の存在と『老子道德経』を神話的虚構の集成物とみなす合理的な視点が、テクストの解体的探査の過程を新たなる方法として披瀝したものであることが知れよう。ここではテクストの精細な解体的探査の過程こそが重要なのである。その過程の詳述こそが近代の学術的言説、すなわち古代文献学なのである。

さて「老子五千言」の解体的探査のはてに何が残るのか。それは（純粹老子テクスト）である。「老子本来の学説を知るには、将に今本老子中より、道家以外の学派の思想を除去すべきは自明の理なり。然れどもこれを刪削して純粹に帰せしむるには、先づその方針を定めざるべきべからず」と武内は、テクストから付加された剩余の言説的残滓を取り除いて、テクストを「純粹」に帰せしむるべき判定の規準を列挙する。その規準とは『荀子』『莊子』などに老子言説の特質としてのべられていることばである。それらの標準に照らして武内は（純粹老子テクスト）を推定しようとする。しかし危ういかな、この作業は、最後に求められる（純粹テクスト）とは、歴史的構成物である眼前的テクストから剩余の付加的言説を弁別し、取り除く合理的な方法的意識の相關物でしかないことを明らかにしているではないか。しかも最後に「これが老子だ」とするのも、『荀子』『莊子』における「これが老子だ」とする発言に頼つてでしかない。どこ

までいつても存在するのは〈老子〉をめぐる言説だということではないか。あるいは「純粹老子」をいうこと自体が、近代の文献批判学者の「一家の言」でしかないというべきではないか。

(子安宣邦「近代知と中国認識」による)

注

内藤湖南……東洋史学者、京都帝国大学教授。(一八六六～一九三四)

富永仲基……江戸時代、大阪の市井の儒学者、思想史家。(一七一五～一七四六)

武内義雄……中国古代史研究に文献批判の方法を導入。東北帝国大学教授。(一八八六～一九六六)

テクスト・クリティカル……文献学の一分野。諸伝本を比較考証して吟味すること。また、その研究。原典批判、本文批判、文献批判ともいう。

廻底……ものを入れておく小箱の底。

『老子』……中国古代の思想家老子（老聃）があらわしたとされる書。『道德経』とも。五千余字から成ること

から「五千言」「五千文」と称される。老子は、中国戦国時代の諸子百家の一つである道家の祖とされる。

辞賦、箴銘……それぞれ中国の文体。

会萃……ひとつに集めること。集めてあわせること。

法家、兵家、神仙家……それぞれ中国春秋戦国時代の学者や思想家の学派の名。

『韓非子』……中国戦国時代（紀元前三世紀ころ）、韓非の思想を説いた書。韓非らの学派を法家といふ。

晋・宋……紀元三世紀から五世紀ころの、中国の王朝の名。

神仙の謡詞……不老不死の仙人にかかる奇怪な伝説。

化胡の虚伝……老子がインドに渡つて釈迦となつたなどといふ偽りの伝説。

刪除……削り取ること。

『荀子』……中国戦国時代（紀元前三世紀ころ）、荀子の思想を説いた書。

『莊子』……中国戦国時代（紀元前三世紀ころ）、老子とともに道家の思想を説いた莊子の書。

B

老子五千言が書を成せるは、莊子胠篋篇の後、韓非子解老及び喻老の前にありて、秦漢の際に当るべし。蓋し老聃の言説は、最初その祖述者の楊朱・閔子らの間に誦伝せられて未だ竹帛に上らざりしものの如し。今老子の語中最も古しと思はるる部分が、皆有韻の文なるは、もと口誦に便にせしによるものにして、偶々以て其の書の由来を暗示するものといふべし。然りて老子の出世は孔・墨に後る。故に其の後学が道家を標榜して儒墨に対抗するには、道家經典の編纂を必要とせしるべく、單に經典の編纂を必要とせしのみならず、これを古聖往哲の言に託して儒墨の堯・舜・周文・夏禹に拮抗するを要せしるべし。而して此の必要にせまられて集成せられたるもの、即ち黄帝四經なるべし。

老子五千文中、法家言・縦横家言・兵家言を存して、黄帝書と類似せるもの多きは、老子の編纂がこれら諸書の後にあることを暗示するものにして、その中、韻文と散文とが錯雜するは、口誦によりて伝はれる資料と文献によりて伝へられたる材料とが混在せるによるなるべし。

老子五千言の集成が、秦漢の際にありて、其の中、法家言・兵家言・縦横家言等を混ぜること上述の如しとすれば、老子本来の学説を知るには、特に今本老子中より、道家以外の学派の思想を除去すべきは自明の理なり。然れどもこれを刪除して純粹に帰せしむるには、先づその方針を定めざるべからず。余は、次の三項に留意してこれを削定すれば、略ば大過なかるべしと思惟するものなり。

(一) 五千言中に説ける内容を精査して、これを先秦学術変遷の大勢に照し、苟くも老子以外の諸子の中心思想と符合するものあればこれを刪除すること。

(二) 其の文体の異同を明かにして、新しき部分を去りて古き部分のみを存すること。これを機械的に行ふには、五千言中の押韻を考究して、**a** の部分を除き、**b** の部分を存し、又 **c** の部分中に於ても、韻を転ずる處に留意して後人の附益と思はるものを去れば大過なかるべし。蓋し **d** の部分は口誦によりて伝へられし古き道家言多く、**e** の文中には後人の敷衍に係るもの多ければなり。

(三) 右の二方針によりて刪除し、残されたる部分を、先秦古典中、老子を評論せる語に照して一致するや否やを検し、その一致するもののみを取りて老聃の言に擬定すること。

(武内義雄「老子原始」による)

注

胠篋篇……『莊子』外篇のなかの一篇の名。

楊朱・閔子……いづれも老子と直接会つて、その教えを受け継いだとされる人物。

孔・墨……孔子（中国春秋時代、紀元前六世紀から五世紀ころの思想家。儒家の祖）と墨子（中国戦国時代、紀元前五世紀から四世紀ころの思想家。墨家の祖）のこと。

堯・舜・周文・夏禹……儒家が理想の君主とした堯帝と舜帝、周の文王、夏の禹王。

黃帝四經……漢代の書目に載せられている道家の教典とされるものの名。黄帝は中国の神話、伝説上の皇帝の名。道家では、のちに黄帝を始祖とし、老子を大成者とするようになった。

縱横家……中国戦国時代に合縱または連衡の策を諸侯に説いた外交政略家。

附益……付け加えること。

問一 Aの文章に傍線部1「実証的推理」とあるが、これとほとんど同じことをあらわす語句を、Aの文章中から五字で抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点が含まれる場合は、それも一字とする）。

問二 Aの文章の空欄 に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 異辞同意 各派所伝 ハ 韓非後学 ニ 神仙家言 ホ 伝聞佚事 ヘ 老子伝説

問三 Aの文章に傍線部2「荀子」「莊子」などに老子言説の特質としてのべられていることば」とあるが、それに相当する箇所をBの文章中から十字以上十五字以内で抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点が含まれる場合は、それも一字とする）。

問四 Aの文章に傍線部3「純粹老子」をいうこと自体が、近代の文献批判学者の「一家の言」でしかない」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 近代の文献批判学者は、江戸時代の学者富永伸基から方法的示唆を受け取っているが、その方法論は近代科学的検証を経ていないので、ひとりよがりの域を出ない学説でしかない。

ロ 純粹老子に文章や修辞の不統一は確かにみとめられるが、それは歴史の過程で重みを加えてきたものであり、たとえ古代文献学の方法をもつしても瞬分けなどできるはずがない。

ハ 所与のテクストから、付加された剩余の言説的残滓を取り除いて「純粹テクスト」を求めるにしても、それを〈確かなテクスト〉と判定する目的が曖昧であることは否定できない。

ニ 老子五千言の中には各派所伝の老聃の言が混入しており、いかに合理的視点による実証的推理にもとづいてそれらを取り入れるとはい、〈純粹老子〉が得られるという保証はない。

ホ 老聃伝説と老子道徳經という虚構は、古代に行われた文献批判学の前には解体されるべきものとして存在するのであって、実証的推理によつて解明されるとは決して期待できない。

ヘ 近代の文献批判は、現前の〈不確かなテクスト〉から〈確かなテクスト〉を取り出せるという前提のもとに成り立つてゐるものであるが、この前提は必ずしも確実なことではない。

問五 Bの文章に傍線部4「古聖往哲」とあるが、ここでそれとされる人物を次の中から一人選び、解答欄にマークせよ。

イ 老子 荘子 韓非 楊朱 閻尹 黃帝

問六 Bの文章の空欄 a e には、それぞれ「有韻」「無韻」いずれかのことばが入る。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ	口	ハ	二	ホ	ヘ
老子	莊子	韓非	楊朱	閻尹	黃帝
a	a	a	a	a	a
有韻	有韻	無韻	有韻	無韻	有韻
b	b	b	b	b	b
有韻	無韻	有韻	無韻	有韻	無韻
c	c	c	c	c	c
無韻	無韻	有韻	無韻	有韻	無韻
d	d	d	d	d	d
無韻	有韻	無韻	有韻	無韻	有韻
e	e	e	e	e	e
無韻	有韻	無韻	有韻	無韻	有韻

問七 A・Bそれぞれの文章の内容に合致しないものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ Aの文章の著者は、武内義雄の『老子原始』にみられる文献学的方法に、大阪の町人学者であつた富永伸基からの方法的示唆をみとめている。

ロ Aの文章の著者は、神話的虚構である老子五千言から実証的推理によつて〈確かなテクスト〉を求める新たな古代文献学を批判的にみている。

ハ Aの文章の著者は、今本老子と法家の老子経文に大差ないことから、それらは韓非後学が伝承された老子経文を改編したものと主張している。

二 Bの文章の著者は、老子五千言が一書の形をなすのは、秦漢の時代になつてからであり、そのはじめは口誦されて伝わつたものと考えている。

ホ Bの文章の著者は、老子の後学が道家を標榜して儒墨に対抗する必要から、その權威付けのために黄帝四經などを取り除いたと推定している。

ヘ Bの文章の著者は、老子本来の学説を知るには、今に伝わる老子五千言の中から、道家以外の諸家の思想を取り除く必要があると述べている。

次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えよ。

ひとつの光景が頭を離れない。正確には、ひとつの映像あるいはひとつの画面と言うべきだろう。私自身がそこに立ち会つたのではなくて、テレビの記録番組の一場面なのだから。

にもかかわらず、私にとってその場面は、自分がそこに現に居合わせたかのようなふしぎな現実感を、日ましに濃くしてゆく。テレビの記録映像ではなく、ひとつの現実として、いや、あらゆる現実の現実性、の根拠ないし始原の光景でもあるかのよう、身近なものとして、直接のものとして、現にいま刻々の私自身の出来事としてさえ感じられる。この世の約束の時間で計れば、何万年という遙かな過去の出来事にもかかわらず。

高さ百メートルを越える切り立った崖が、海岸に沿って蜿々と連なっている。海は明るく穏やかだ。断崖の上は深い熱帯の密林がひろがっている。

暗灰色の断崖の表面に、海面と並行して白っぽい横縞よこじまが走っている。縞の幅は十メートルぐらいだろうか、その灰白色の縞の一部が幾分くぼんんでいる。洞穴どうけつというほど深くはない。暗くもない。かつての共同墓地ないし遺体を安置する聖所の跡のようである。いまも遺骨が散乱している。海は青く、骨は乾いて白い。

その骨のちらばるくぼみの岩壁に、それがあった。数十にのぼる人間の掌の形が、いまもくつきりと残っているのである。掌の形を描いた絵ではない。それなら別に驚くことはない。掌を岩壁の表面にぴたりと押し当てて、そのまわりに赤茶色のガソリヨウガソリヨウを丹念に吹きつけたものである。つまり掌の形が灰白色の岩の表面に、いわば白抜きに浮かび出しているのだ。

白骨の重なる断崖のくぼみの岩の表面に、そんな白抜きの無数の掌の痕。しかもそれぞれの掌の一本一本の指の形まで、くつきりといまも鮮やかだ。掌の痕というより、生きた掌の群がゆらゆらと、あるいはひらひらと、音もなく重なり合つて揺れて、そよいでいるように見える。

テレビの説明では、三万年ほど昔のものらしいと私は聞いたつもりだが、その光景の鮮やかさは、ついこの間のことのようだ。いや白い掌の群のゆらめきは、いまの私自身の意識の奥の光景であるかのようになまなましい。異様になまなましい。

一九九一年初め、どのテレビも連夜、ペルシア湾岸戦争の映像と解説を流し続けていた時期に、TBSが放映したイリアン・ジャヤ（ニューギニア島西半部）のルポルタージュの一場面である。女性ディレクターが取材制作した真に記録的な、とは安易な物語性に流れないすぐれた記録作品だつた。

同じ断崖の一部だつたか少し離れた場所だつたか、掌のそよぐ墓地よりかなり後の時代と思われる岩絵の紹介もあつたが、これには私の意識はほとんど感應しなかつた。それは円や同心円や舟や人間の形を稚拙な記号として描いたもので、そのような記号化された古代の岩絵や洞窟画なら、私たちはオーストラリアやヨーロッパやアフリカで驚くべく巧みなものを、数多くすでに見ている。

白抜きに残された掌の形の中には、指が欠けているものがある。二本も三本も指の根もとから切断されているのだ。これを断崖に残した人たちの子孫と推定される採集民の部族が密林の奥で生活しているのだが、その中には同じように指をつめた人たちがいまもいる。愛する肉親が死ぬと指をつめるのだという。その人たちの指の欠けた掌は、断崖のくぼみに残る掌の群の中の、指のない掌の形と、ほとんど重なり合う。

B これは記号ではない。

イ

死という不可解で絶対的な事実に対する、生身の人間の直接の反応、形にならぬ、言葉にさえならぬ深層の震えが、そのままそこに出現したのだと私は思った。

人類が死を意識した（死体を認知するだけでなく）のは、旧人ネアンデルタール人のあと新人ホモ・サピエンス・サピエンスつまりわれわれ現存人類の段階になってからだとされている。**ロ** ネアンデルタール人たちにも、西方に向かつて並べられた頭骨の列とか、赤土をふんだんに使い、花をばらまいた花粉が残っている墓地など、葬送を意識した遺跡があるとよく言われていたが、最新の人類考古学のチケンは否定的である。**ハ**

約五十年前の北京原人の遺跡からは、脳や骨髄をすすって食べたらしいあとの人骨が、動物たちの骨と一緒に捨てられている。**ニ** 東アフリカに現在棲息するヒヒたちの母親は、赤ん坊が何かの原因で死んでも胸に抱き続けて、死体が解体しはじめるときに異物だと気づいて、何の未練もなくほうり捨ててしまう、という動物学者の報告を読んだことがある。

他の生物が死んでいる事実なら、ほとんどの生物が認知するだろう。

ホ

だが自分自身も含めて死が全生物の逃れられぬ事実だとおびえ恐れ、死についてさまざまに考え始めたのは、わずか数万年前からのことと思われる。

イリアン・ジャヤ南西海岸に残った掌の形が三万年ほど前のものらしい、というテレビの説明を、私が聞き違えたのでなければ（その可能性もなくはない）、あの断崖のくぼみは、人間が死を強く意識し始めてそれほどたっていない時代のものである。

現在までその子孫たちが残っている彼らは、約十萬年前ごろから世界各地に広まつたわれわれ現存人類の古型だ。一万一千年前に氷河期が終るまで東南アジアにあつたふたつの陸地のうち、五万年前ごろ西方の「スンダランド」から「サフルランド（現在のオーストラリア大陸とニューギニア島がつながつたもの）」に渡つた集団の一部と考えられるが、

この遺跡は人類が死を自覚的に意識し始めた時期の、最も鮮烈で最も美しく怖ろしい体験のひとつと思えてならない。

死んだら魂はどうなるか、死後の世界があるのか、といったもろもろの宗教的、神話的思考がつくり出されるより前、死という観念、死という言葉が、この世界に滲み出てきた現場のように見える。いや言葉そのものがこのようにして、葬送儀礼の始まりと時期を同じくして、つまり死の意識化とともに生まれたのではないか、と考えたい誘惑をおさえ難い。

記号やシンボリックな形象がその後世界じゅうで墓地内部を飾ることになるが、記号やシンボルは描かれる前にすでに意識化されたものである。形あるもの、意味あるものだが、その前に死という不可解な事実を自分自身のこととして自覚し始めたときの、身をよじって嘆き、指を切り落とすというような直接的な反応しかできなかつた段階があつたのだろう。その肉体的な、意識の奥からつきあげてくる恐怖と嘆きの、言い難い衝動。どうしてこの世界に死というものがあるのか、親しいものたちとの慈悲な別れが避けられないのか、その答えは言い難く答え難い。言い難いからこそ言わねばならない。何か形をつけねばならない。

これはコミュニケーションの手段としての言葉と次元を異にするいわば **I** である。動物たちも声をつかつてコミュニケーションする。身振り、表情その他のコミュニケーションと同じ次元で、動物たちは言葉がないから意思疎通に困るだろう、というようなことはない。彼らはそれぞれの生活圏の中でお互いの同士、十分にコミュニケーションしている。(日野啓三「断崖にゆらめく白い掌の群」による)

注 スンダランド……現在のタイのチャオプラヤ川の流域からタイランド湾、南シナ海を含む一帯に、氷河期に存在した陸地。

問八 傍線部 A 「これには私の意識はほとんど感心しなかつた」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ その岩絵よりもずっと精巧な形象がオーストラリアやヨーロッパやアフリカの洞窟の壁に描かれているから。
- ロ その岩絵が白抜きの掌の痕よりも後の時代のものと思われ、考古学的にみて貴重さの度合いが劣るから。
- ハ その岩絵は円や舟や人間の形象を稚拙に描いていて、心が深く振り動かされるほどの美意識に欠けていたから。
- ニ その岩絵は記号として描かれていて、生身の人間の意識の奥からつきあげてくるような反応が感じられないから。

問九 傍線部 B 「これは記号ではない」とあるが、その説明として最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 著者は、断崖のくぼみにある指のない掌の痕が、愛する肉親の死に対する言語化できない哀悼を表現するために残されたと考へてゐるから。
- ロ 著者は、断崖のくぼみにある指のない掌の痕が、意識化の過程や抽象的思考を経た記号の出現ではないと考へてゐるから。

- ハ 著者は、断崖のくぼみにある指のない掌の痕が、死という観念や死後の靈魂といった新しい次元を予感させる考へてゐるから。
- ニ 著者は、断崖のくぼみにある指のない掌の痕が、言語をまだ持たない人間の死者に対するコミュニケーションの現れと考へてゐるから。

問十 次の文は本文中に入るべきものである。空欄 **イ** — **ホ** から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

死期を予感する動物たちもいるかもしない。

問十一 傍線部C「考えたい誘惑をおさえ難い」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 著者は、旧人アンデルタール人に葬送儀礼の始まりを認めたいと考えているのに、死の意識化をめぐつて最新の人類考古学の情報と矛盾することに気づいたから。

ロ 著者は、断崖のくぼみに残る掌の痕を意識の原光景とみなしているので、それを葬送儀礼のはじまりとみなすとき、実際以上に宗教化してしまうことに気づいたから。

ハ 著者は、断崖のくぼみに残る掌の痕は記号ではないと主張しているのに、それを死の意識化のはじまりとみなすとき、自らの主張が矛盾をきたすことに気づいたから。

- 二 著者は、旧人アンデルタール人が死を意識化し始めたと考えているので、掌の残る断崖の壁を死の記号化の現場とみなすとき、自説の同語反復に気づいたから。

問十二 空欄

I

に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 実存の言葉
ロ 意識の言葉
ハ 生活の言葉
ニ 事実の言葉

問十三 本文の趣旨と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 著者はテレビで放映された岸壁のくぼみに残る掌の痕に、人類が死をはじめて意識化した兆しを見ようとしている。

ロ 著者はテレビで放映された岸壁のくぼみに残る掌の痕に、人類がはじめてコミュニケーションを意識化して行つた痕跡を見ようとしている。

ハ 著者はテレビで放映された岸壁のくぼみに残る掌の痕に、指の欠けたものを認めて記号になりきらない生身の反応を見ようとしている。

- 二 著者はテレビで放映された岸壁のくぼみに残る掌の痕に、人類が言語を使いこなす以前の体をつきあげてくる衝動を見ようとしている。

問十四 傍線部1・2のかタカナの部分を漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

(三) 次の甲・乙の文章を読んで、あととの問いに答えよ。

甲 「次の文章は、永積安明『徒然草を読む』（一九八二年刊）の一節による。」

兼好には、「合理」の世界を超える宗教的奇跡が、必ずしも否定しがたい世界として見えていたのであって、たとえば第六十八段には、

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土太根（あわらね）を方にいみじき薬（よみづ）とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひける事、年久しうなりぬ。或時、館（やか）の内に人もなかりける暇（ひま）をはかりて、敵襲（かたさし）ひ來りて囲み攻めけるに、館のうちに兵（へい）一人出で来て、命を惜（さ）しまず戦ひて、皆追ひかへしてげり。いと不思議に覚えて、「日比ここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年来たのみて、朝な朝な召しつる土大根らにさうらふ」といひて失せにけり。

という、筑紫の国に伝わる、大根の精霊についての奇跡的な説話をとりあげているだけでなく、この辺境地帯における素朴な庶民信仰の説話を、

深く信を致しぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

と肯定的に受けとめており、またつづく第六十九段にも、

書写の上人は、法華誦誦の功積りて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の仮屋に立ち入られるに、豆の殻を焼きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、恨めしく我をば煮て、辛き目を見するものかな」と言ひけり。焚かるる豆殻の、はらはらと鳴る音は、「我が心よりすることかは。焼かるるはいかばかり堪へがたけれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞こえける。

という、法華誦誦の聖人たる書写上人の功德譚（ほんぐだん）を探りあげている。

この説話は、もともと中国は魏の文帝に、七歩のうちに作詩せよとの難題を課せられて、弟の曹植（そうぢつ）が作った詩の、「其在釜下燃、豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急」（世説新語）「文学」・「蒙求」「陳思七步」等）にもとづくことは、古注以来指摘されているが、七歩の詩は国内でも、『懷風藻』その他に採りあげられるなど、早くから知られており、その後、この説話が土着しつつ一般に流布したであろうことは、『徒然草』に先立つ『十訓抄』（卷六）などにも、骨肉間の争いを述べて、この詩を引用しているとおりで、兼好の時代には書写の上人の六根清淨説話に転形していただらしい、この奇跡譚をも、『徒然草』はそのまま敬虔（けいけん）に記しとどめているのである。

限りある人間の智恵には、当然及びがたい世界のあることを知っていた兼好は、また凡慮には測りがたい宗教的な奇跡をはじめとする非合理的の世界を、有限の「合理」によって安易に否定し、あるいは逆に何の保留もなく、これを全面的に信仰してしまうことが、いかに人間の可能性を阻害するかを見とおすこともできたのであって、こうした観点に立てば、仏神の世界の奇跡だけでなく、人間の世界にしばしば現前する不可思議についても、一概にこれを否定せず、現象世界の一つの相として、その存在を認める道がひらけ、そこに測りがたい人間生活の実像を見届けようとする意識も芽生えるであろう。だから『徒然草』の中には、古注以来その真意を捕捉しかねてきた諸段、たとえば、

因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親ゆるざざりけり（第四十段）。

という、五穀の類を全く口にせず、栗だけ食べて生きていた不思議な美女と、その女に言い寄つてくる求婚者たちを拒否しつづけた親についての A が、作者の何の限定もなく記されていたり、また第四十二段の、

唐橋中将といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師とする僧ありけり。氣の上（あが）る病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりけれども、眉・額なども腫れまだひて、うちおひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えるが、ただ恐ろしく、鬼の顔になりて、目は頂（かみ）の方につき、額のはど鼻に成りなどして、後は坊の内の人にも見えずこもりみて、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。かかる病もある事にこそありけれ。

と記しているような、世にも不思議な奇病にとりつかれた行雅僧都についての A なども収められている。この、「かかる病もある事にこそありけれ」という表現には、常人の理解を超える奇怪な事態を、眼を見張るような驚きの心でもつて記し留めながら、しかもそれなりに現世の犯しがたい事実として、そのままこれを受けとめようとする兼好的態度が見えるのである。

およそ不可思議な現実の諸相を視野に入れながら、しかも多様な現象世界の海に流されることなく、しだいに理性的に実像を抱えるようになつた兼好は、現世の生きかたにおいても、第一期時代のそれを超えてしまうのであって、かつて第一段では、人間として望ましく願わしいことどもを、あれこれと掲げ示して、

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙がらず走りがき……。

などと記していた彼が、第百二十二段では、それらの道みちが、貴族社会に生きて行こうとする者にとつて、必須の教養であることを説くところまでは、第一段の主旨と、さして変るところはないが、つづいて、

次に、食は人の天なり。

と、「帝範」の「務農」篇や「史記」の「酈食其伝」等に見える典拠をふまえて、民にとって、食物は天のごとく至るもの、生活の基本であることを述べただけでなく、そこから一転して、

よく味を調へ知れる人、大きな徳とすべし。次に細工、万に要おほし。

とまで説き進んでいるのは、もはや原典の抽象的な政治論から、具体的な日常世界へと下降し、調理やはかない手細工に象徴されるような世俗的な実利の生活を積極的に評価し、かつては否定した現世的な生活に役立つ有用性を率直に認めはじめているからにはならない。

こうした現実を確認しながら兼好はさらに、

この外の事ども、多能は君子の恥づる処なり。詩歌に巧みに、糸竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むる事、 **B** 金はすぐれたれども、鉄の益多きに及かざるがごとし。 と説いて、この一章を結んでいるのであるが、ここでは古代王朝社会において、君臣ともに尊重してきた「幽玄」の道も、「今之世」では、「 」と断言するようになつていて。

本来、「幽玄の道」は王朝貴族社会の価値の象徴であり、「徒然草」の世界をも貫通する基本的な精神であった。しかし、この価値を至上のものとしてきた兼好も、いまでは、「幽玄の道」が時代の要求に適応できなくなり、「鉄の道」つまり、実益を優先する現実的な政治に及ばなくなってきたことをついに確認するにいたつたのである。これこそ王朝文化の、そうしてまた、かつての兼好自身が存立の拠りどころとしてきたところの、ほかならぬ貴族的な価値の基本に対する、根源的な批判の地点にまで兼好の眼が届きはじめたことにはかなるまい。

従来、この段に見られるような現実的な思想の展開は、まだ元弘の乱に突入していない時期に、兼好が新しい時代を予感し、早くも貴族政治の没落を先取りしていたのによるかのように考えられてきたのであつたが、これも『徒然草』の執筆年代を元徳・元弘間の一年たらずの間に限定した橋学説に縛られたためで、この学説から解放されて本文の語るところを読み返してみれば、『徒然草』の表現は、兼好がすでに貴族世界の崩壊する諸相をまのあたり見ていたことを語つており、そこには南北朝の内乱という未曾有の変革に遭遇しつつあつた貴族社会の、切迫した危機に当面しての飛躍的な思想の展開が見えてくるはずである。

注 六根淨にかなへる人……修行により心身ともに仏に近い能力を身につけた人。

第一期時代……筆者は『徒然草』は第三十段あたりまでが最初に書かれたとを考えている。その時期のこと。

元徳・元弘……元徳（一二三九～一二三一年）・元弘（一二三一～一二三四四年）。

橋学説……『徒然草』は元徳一年から翌元弘元年までの約一年の間に成立したとする橋純一の学説。

乙 「次の文章は、甲に言及される『帝範』「務農篇」の一節による。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

注 倉廩……穀物の貯蔵庫。 水旱……大水とひでり。

授民時……人々に農業の種まき、取り入れを示す暦を授ける。

帶犢佩牛……子牛や牛を腰の刀剣として帯びる。『漢書』循吏伝に基づく、人々に農耕を勧めるたとえ。

螟……稻の茎を食う害虫。 浮華……上辺だけ華やかで実質の乏しいこと。

耕織……田を耕し、機を織ること。

問十五 甲の文章の傍線部1 「兼好には、「合理」の世界を超える宗教的奇跡が、必ずしも否定しがたい世界として見えていた」とあるが、兼好にはなぜそのように「見えていた」のか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 兼好は、出家していたので、たとえ非合理的な話であつたとしても、仏教に関する話は否定できなかつたから。
ロ 兼好は、仏道修行を通して、人間世界では非合理とされる事象も切り捨てられないと考えるようになったから。
ハ 兼好は、人間生活の実像を合理的に考へるために、限りある人間の知恵だけでは不足すると考えていたから。
二 兼好は、人間の知恵は絶対ではないので、常識的な論理や道理では捉えきれない世界もあると考えていたから。
ホ 兼好は、不可思議な現象や物語も好きだったので、宗教的奇跡も否定するわけにはいかないと考えていましたから。
ヘ 兼好は、人間の知恵は有限だと知つていたので、宗教的奇跡を排除したら悟りをひらけないと考えていたから。

問十六 甲の文章の二重傍線部X 「朝」とに」・Y 「不思議に」・Z 「土大根らに」の「に」の説明の組み合わせとして最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | |
|---------------|-------------|----------|
| イ X 形容動詞の活用語尾 | Y 副詞の一部 | Z 格助詞 |
| ロ X 格助詞 | Y 形容動詞の活用語尾 | Z 断定の助動詞 |
| ハ X 副詞の一部 | Y 格助詞 | Z 完了の助動詞 |
| ニ X 完了の助動詞 | Y 副詞の一部 | Z 完了の助動詞 |
| ホ X 格助詞 | Y 完了の助動詞 | Z 断定の助動詞 |
| ヘ X 副詞の一部 | Y 形容動詞の活用語尾 | Z 格助詞 |

問十七 甲の文章の傍線部2 「十訓抄」と最も近い時期に成立した作品の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 因果応報を説く説話を数多く収めた景戒編の説話集。
ロ 口主人公世之介の一代記の体裁をとつてゐる浮世草子。
ハ 「鏡物」の先駆作品として位置付けられる歴史物語。
二 約五十年間に及ぶ南北朝の動乱を描いた軍記物語。
ホ 真名序と仮名序を持つ源通具らが撰者の勅撰和歌集。
ヘ 天竺・震旦・本朝の説話を収めた日本最大の説話集。

問十八 甲の文章の傍線部3 「書写の上人の六根清淨説話を転形」とあるが、その変化した内容について説明した文として最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「七歩の詩」では豆の豆殻への恨み言だけが語られているが、『徒然草』では豆殻の弁明までも語られている。
ロ 「七歩の詩」では豆は恨みを述べているだけだが、『徒然草』では法華經の教えを取り込みながら怒つてゐる。
ハ 「七歩の詩」では豆と豆殻は肉親の関係とされているが、『徒然草』では仲の良い友人関係に変えられている。
二 「七歩の詩」では豆と豆殻は対立する兄弟を象徴しているが、『徒然草』ではいがみ合う親子を象徴している。
ホ 「七歩の詩」では豆が強火であつという間に煎られているが、『徒然草』では弱火でじっくりと煮られている。
ヘ 「七歩の詩」では豆と豆殻は同じ釜で煎られているが、『徒然草』では豆殻が豆を煮る物語に変えられている。

問十九 甲の文章の空欄 A に入る語として最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 寓話 ロ 実録 ハ 武勇伝 ニ 聞き書き ホ 暴露話 ヘ 書き付け

問二十 甲の文章の傍線部4「かつては否定した現世的な生活に役立つ有用性を率直に認めはじめている」とあるが、なぜ兼好は「認めはじめ」たのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 錯い知性に基づいて時代状況を分析し、新しい時代が来るることを兼好が予見することができたから。
ロ それまで支配し続けていた貴族的な考え方に対し、仏教界に身を置く兼好が批判的にならなかったから。
ハ 社会が大きく変わり、伝統的な貴族の世界が崩れた元弘の乱後の現実を兼好が実際に目にしたから。
ニ 「徒然草」を執筆していた数年の間に、多様な生活を送る人々に出会い兼好が考え方を改めたから。
ホ 世俗的な実利を重んじる生活を送る人々を見て、時代が変わるものとを兼好が予見したから。
ヘ 社会制度が変わり貴族政治が崩壊したこととなつた南北朝の乱が起ることを兼好が予測したから。

問二十一 甲の文章の空欄 **B** に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すべて美しいこととなりにけり
ロ 暫くはあたにならずと覚ゆ
ハ ゆかしきことになりたり
ニ さはいたづらにならむや
ホ かくゆしくなりぬべし
ヘ 漸くおろかなるに似たり

問二十二 乙の文章における空欄 **C** ・ **D** ・ **E** に入る語として、a～fを組み合わせた場合に、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|---------|---------|---------|------|------|------|
| a 農桑 | b 豊厚 | c 剛柔 | d 寒温 | e 賞罰 | f 礼節 |
| イ a・b・e | ロ b・e・f | ハ c・f・d | | | |
| ニ d・a・c | ホ e・c・b | ヘ f・d・a | | | |

問二十三 乙の文章における傍線部5「此務農之本也」は、この部分の結論であるが、そう述べる理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 食糧は人を支配する天のようなものであり、国家には常時一年分の蓄えがそなわっていなければならぬから。天子は郊外で農耕の儀式を厳密に行い、率先して農事に携わることによつて、暦を作成することができるから。
ロ 農業の発展のためには、家畜を養うだけでなく、農民が自ら外敵に向かうために武装しなければならないから。
ハ 農業は一人が耕せば、それだけで百人分の食料を確保することができるため、農民の数は多くなくてよいから。
ニ 害虫や干ばつの発生により大きな打撃を受けても、畜産に励んでいればなんとか生き延びることができるから。
ホ 華美な生活を抑えることによつて、競つて愛情や正義の心を伸ばして、むさぼりの心を絶つことができるから。

問二十四 甲・乙のいずれかの文章の趣旨と合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 每朝大根を食べていて筑紫の国の押領使は、敵に襲われた際、命がけで戦つてくれた大根の精霊に助けられた。
ロ 因幡國の入道の娘は栗しか食べない変わり者だったが、気だての良い女性だったのに多くの人から求婚された。
ハ 病氣で鬼のよう恐ろしい顔になつた行雅僧正を恐れ、人々は上人と会わないと部屋に籠もつてしまつた。
ニ 兼好が現実世界を合理的に捉えられた理由は、貴族の有職故実を体得し物事を論理的に考えられたからである。
ホ しっかりととした農業ができる環境を作る政治を行い、食料が満ち足りれば、人は儀法をわきまえるようになる。
ヘ 人間にとつて最も重要な食料を作る農業を守れる政治を行うよう、帝王と人は協力しあつていかねばならない。

〔以 下 余 白〕

(採点欄)

<2021 R 03152023>

受 験 番 号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。



(二)

問十四

(一)

問三

(一)

問一

<2021 R 03152023>

受 験 番 号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国

語

(記述解答用紙)

(二)

問十四

1

(一)

問三

2

(一)

問一